

第7分科会

「幼児期の終わりまでに育ってほしい 姿を踏まえた保育実践」

助言者	西元 道子 (第一幼児教育短期大学幼児教育科教授)
司会者	森田 美帆 (枕崎幼稚園)
問題提起者	中川路莉子 (指宿幼稚園)
記録者	上迫 麻紀 (指宿幼稚園)
記録者	吉住 彩花 (指宿幼稚園)
運営委員	永野 美穂 (長野幼稚園)

【研究課題】

子ども理解

【研究・研修の視点】

年度のはじめは、教職員、園児ともにアレコレと緊張したり不安の材料はあるものであるが、今年度の年度始めは、特に準備には時間がかかったし、苦労も多かった。それは当学園が設置している二つの幼稚園が、必要な教職員を確保できずに、結果止むなく、一園を休園にして、教職員、園児ともに一つにまとめることになったからである。例年に増して、緊張や不安を感じながら、落ち着いて充実した幼稚園生活を目指す毎日である。

今回の研究は、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を考えるということである。我が園ではその中の協同性に焦点を当てることにした。協同性というのは、非認知能力といわれるもので、教えることはできず、環境によって育つものといわれる。ゆったりと安心して過ごせる環境が大切であろうが、今年度の我が園の状況は、どのように影響するのだろうか。

【研究・研修の手がかり】

- ・二つの園が一緒になるというこれまでにない環境と、例年の環境との違いに目を向けて研究する。
- ・新年度を迎えた子どもたちが、月を追うごとにどのような育ちを見せたかに目を向けて、保育の在り方を考察する。

【研究計画】

(令和6年度)

- ・幼稚園生活を通して、協同性の育ちを考える。

(令和7年度)

- ・各年齢の目指す幼児像から、主体的・対話的で深い学びにつながる幼児の姿をエピソードで取り上げ、保育実践を深める。

【発表の概要】

(1) 研究・研修テーマの捉え方

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を意識しながら、私たちは毎日の保育をしている。本園は今年度、姉妹園が合併し、昨年度まで別々で過ごしていた子どもたちが同じ場所で保育を受けるため、初めて出会う友だちや保育者に囲まれて新年度がスタートした。例年とは違う環境の中、保育者も子どもたちも戸惑いがありながらも日々の生活の中で互いにかかわり合い、子どもと保育者、子ども同士の関係性を築きあげているところである。

そこで、年齢別クラスでの毎日の活動と異年齢同士でかかわる朝の自由遊びの、子どもたちのやり取りや遊びの様子を観察して捉え、どのような援助をすれば遊びがより豊かになるのか、私たちに何ができるのかを考えることにした。

(2) 研究の内容

新年度を迎え、環境が変わることに加えて、合併という園児にとっても大きな環境の変化があった。その中で、安心して楽しく園生活が送れるようにするためには、保育者としてどんな働きかけが望ましいのか。

(3) 研究の方法

ア 毎日の様々な活動の中から、研究内容に沿った子どもの姿を拾い上げる。

イ アから拾い上げたものを評価し、保育者としてどのようなかかわり方が必要かを考える。

(4) 実践例

ア 年齢ごとのクラス活動の内容

イ 全クラスでの自由遊び(砂場遊び)

(5) まとめ

合併という子どもにとって大きな環境の変化の中で、初めは馴染みのある友だち同士で遊ぶことが多かった。今回“協同性”に着目し、お互いにかかわりが持てるよう、それぞれのクラスで、座る席や並び方、皆でできる遊びに保育者も参加して馴染みのない友だち同士でペアを組むなどの工夫をしながら、きっかけを増やしていくようにした。試行錯誤しながら様々な活動に取り組んだ結果、現在、名前を呼びあうことが増え、遊びに誘い合ったり、ひとつのことに一緒に取り組もうとする姿などがみられるようになった。

また、異年齢同士でかかわる朝の自由遊び(砂場遊び)では、山・川作りをしていく中で、初めは同じ場所で別々の遊びをしていた子どもたちが、クラスでのかかわりが増えたことや、保育者の様々な働きかけによって、一緒に過ごす時間が増えたことで、みんなでやってみたい気持ち生まれ、工夫したり、自分の役割を考えて行動するなど、力を合わせるようになってきている。異年齢の子どもたちが混ざることによって、他の子どもがしていることを真似たり、周囲の物や遊具などとの多様なかかわり方を学び、自分の中に取り込んで自ら行動しようとする姿がみられているところである。

(6) 今後の課題

ア・自分から輪に入るのが難しかったり、新しい友だちとの接し方に戸惑ったりしている子どもが自分の思いを伝え、自分らしくいられるようにしていきたい。

・自らやりたい気持ちが強くて、言い合いになったり手が出たりすることもあるので、集団生活の中で気持ちの折り合いのつけ方や、決まりの必要性に気付けるような援助を考えていきたい。

イ・自分の思いと友だちの思いが異なることもあり、ぶつかったり、自分の意見を押し通そうとする場面も見られているので、ある部分はお互いに我慢したり、友だちの思いを受け入れたりしながら、活動を展開できるようにしていきたい。

・使う道具が決まってきているので、遊びが更に充実するようにバリエーションを増やしていく。

【討議の柱】

- ・ 年度始めのクラス経営で、特に配慮していることは何か。
- ・ 協同性を育てるために必要なものは何か。

【討議内容】

1 公開保育の感想・質疑・応答

- (1) (感) 4歳児クラスの「忍者ごっこ」では、忍者という世界観に入り込めるような保育者の工夫や、子どもたちのイメージがたくさん感じられた保育だった。また、元気があって子どもたちも生き生きしていた。
- (2) (感) 今後、iPadを取り入れていく予定で、今回の公開保育で見た「おやくそく」を参考に自園でもICTに取り組んでいきたい。
- (3) (質) 2歳児クラスの活動で魚を見つける遊びをしていたが、今日の保育に至るまでの活動が何かあったのか。
(答) 「きんぎょがにげた」の絵本を好きな子どもが多く、海の生き物をテーマにした壁面づくりを行うことになった。そのため、海にちなんだ活動を取り入れた。
- (4) (質) 年長クラスでICTを取り入れた活動を行っていた。これまでの活動でICTを使った活動や自由遊びがあれば教えてほしい。
(答) お絵描きができるアプリを利用し、自分たちの似顔絵を描いてグループ紹介を行った。自由遊びの際は、表に自分の名前を書き、子どもたち自身が時間を決めて、その時間内は自由に使用できるようにしている。
- (5) (質)・「KITS」のアプリ「とりえ」では、子どもたちが撮影した様々な色の写真を集めてステンドグラスになる活動を行っていたが、そこから今後、どのような活動に繋がっていくのか。
(答) 子どもたちが撮影した写真を1枚ずつ見ながらどこで撮影したものなのかを紹介し合ったり、無色のステンドグラスに自分たちで色を決めて製作したりする活動に繋がっていく。

2 問題提起についての質問(事前アンケートより)

- (1) (質) どんな風に合併のことを子どもたちに伝えたか。
(答) 園舎を移動するのは柳和幼稚園(姉妹園)の方だった。そのため、主に柳和幼稚園の子どもたちに指宿幼稚園の様子を伝えたり、新学期が始まる前に数日間一緒に過ごす日を設けたりした。
- (2) (質) 合併して大変だったことは何か。
(答) 登降園をそれぞれの園で行っているため、朝と帰りに職員が全員揃わず連携が取りづらくなったこと。
- (3) (質) 合併してよかったことは何か。
(答) 合併する前は1つのクラスが少人数であったが、合併して1クラスあたりの人数が増えたことで気の合う友達ができやすい環境となり、表情が生き生きする場面が見えるようになってきたこと。

3 グループ討議内容～グループ発表より～

(討議の柱1) 年度初めのクラス経営で、特に配慮していることは何か。

- ・ 保育者との関わりのみでなく、子ども同士の関わりもできるように援助する。また、人との関わりが苦手な子に対しては保育者が仲介に入る。
- ・ 全職員へ子どもの姿、特性を伝達し、グループの配置などに配慮する。
- ・ 前年度に子どもたちが好きだった活動を取り入れ、子どもたちが新しい環境に慣れるような環境づくりを行う。
- ・ 少人数のクラスにすることで、大人数だと自分を出すことのできない子への配慮に繋がり、保育者も丁寧に保育を行うことができる。
- ・ 保育者自身も楽しく生活し、子どもの安心できる基地として構える。
- ・ 子どもと笑顔で関わることで信頼関係を築く。
- ・ ZOOMや面談、家庭訪問を通して1年間どのように過ごしたら良いかを話し合い、子ども理解を行う。

(討議の柱2) 協同性を育てるために必要なものは何か。

- ・ 保育者が協同性についての知識、理解を深める。

- ・ 保育者も一緒に遊びに参加して、子どもたちの「やりたい」という気持ちを大切に、子どもたちの声を拾い上げながら、子どもたちが気付ける声掛けをしたり、友達との関わりを広げたりする援助を行う。
- ・ 子どもの発言をメモに残したり、写真を撮影したりする。それをもとに表を作成し、年に1回、研究保育を行い、園内研修をする。
- ・ 子ども同士のグループ活動(話し合い)を行い、1つのテーマに沿って意見を出し合って、自分の思いを伝えたり相手の思いを知ったりするきっかけをつくる。その際に子どもの発言を待つ時間を十分に設ける。

【助言者のまとめ】 助言者：西元 道子先生(第一幼児教育短期大学幼児教育科教授)

- ・ 10の姿は年長の3学期の子どもたちの姿を想定して作られており、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に全く同じ文言で記載されている。平成30年の改訂により3つの形態の違う幼児教育の施設が同じマニュアルで教育を行うようになったことは世界的にも珍しく注目されている。
- ・ 人間関係が育つために必要なことは、子どもたち自身の心身の安心感と人に対する信頼感である。心身が安定することで「他」の存在に気付き、社会性の育ちに繋がっていく。乳幼児がよく行う繰り返しの行動に対し、大人が根気強く受け入れることで信頼感の育ちに繋がっていく。
- ・ 園、地域、社会が子どもを真ん中として、子どもたちが育っていく社会が求められる。子どもを取り巻く環境は時代と共に変化するが、保育者が保護者や周辺の組織と関わり合って園の運営をしていくことは変わらない。子どもの最善の利益のために周辺組織、そして園外の専門家と関わり合いながら保育を実践していくことが大切である。
- ・ PDCAサイクルは園全体はもちろんのこと、担任が自分の保育を振り返るために利用できる身近なものである。発達の特徴がある子どもが増えているなど子どもの姿や育つ環境が変化するなら、行事の取り組みや保育の内容もそれに合わせて変化するべきだ。
- ・ 乳児期からの育ちが幼児期の終わりまでに育ってほしい姿として繋がっている。協同性は年長の3学期にすぐに身につくものではなく、年少・年中、もっと言うと乳児期から見通しを立てて子どもたちに働きかけていくことにより身につけていく。

<事前アンケートの助言者への質問に対して>

- ・ 発達の特徴がある子に関しては、今のその子の育ちを大切に、長い目で見守っていく。10の姿も年長まででなく小学校入学後もその姿を目指していく。
- ・ 年中児は遊びの勝敗にこだわる姿が見られ、年少児は自分本位に行動することが多い。この姿は当たり前であり、その年齢ごとの社会性の育ちである。
- ・ 10の姿を実践する上で最も大切なことは、保育者それぞれの保育観や園の方針で何を大事にしたいと考えているのか、である。
- ・ 小学校との連携については、園での活動をより分かりやすく伝えることができるため、アプローチカリキュラムを活用する。
- ・ コロナ禍で、人と関わり合う体験が乏しかった子どもたちのコミュニケーション力に関する調査研究結果は、今後明らかになっていくと思う。

